

## 調査報告

# トロス司教座聖堂発掘報告（二〇一三） — 考古学・建築上の知見から

浦野 聡

## キーワード

ビザンツ 聖堂 レリーフ アーキトレーヴ 墓 副葬品

トロス司教座聖堂発掘チームは、二〇一三年七月二三日に南側廊部と南翼廊部の発掘に着手し、八月三日までにこの部分の瓦礫と堆積土を、昨年度・一昨年度同様、北側翼廊と身廊を繋ぐ内部戸口の敷居石レヴェル（四七二・七五五m）まで除去した。これにより、聖堂内、床上一〇〜数十cmを残してすべての瓦礫と堆積土は取り除かれたことになる。これまでと同様、このレヴェルより上から生活痕は見いだされなかったが、わずかに第4室では、身廊に通じる内部戸口の敷居レヴェルから、火の跡と、ほぼ完形に復元できる中型の粗製の壺が、中期ビザンツ彩釉陶器の断片とともに見つかっている。第5室から青銅製小型燭台、

第6室からは鉛製封緘、第7室からは金貨とドアの取っ手が発見された。

さらに八月三日から四日にかけて、南翼廊部第6室の第4号墓を緊急発掘した。下に詳述するが、おそらく三つの違う時代に属する五体の遺骸が確認され、副葬品の青銅製品数点が発掘された。第7室には三m×二m、高さ二〇〜三〇cmほどのプラットフォームが見いだされている（家族墓と推定されるも、未発掘であるので番号は付けていない）。

その後、八月一三日から二四日まで、身廊部と北側廊の境界をなす仕切り壁10を挟んで、北翼廊部第2室と祭壇部

の一部につき、床面まで掘り下げた。第2室からはおそらく聖堂創建当時のモザイク舗床が発見される一方、祭壇部の床面は激しくダメージを受け、石やモルタルなどにより補修されているものであることが判明した。この区画について現状保存の作業を行い、最終的に不透水シートをかぶせた上に川砂を乗せて保存した。この作業の指揮はイタリアのモザイク保存・修復の専門家テデスキが執ったものであり、床面の美術的・技術的評価や保存作業の詳細は近刊のテデスキの報告に譲る。八月一日から二二日までには同時に、太記祐一の指揮により、瓦礫と堆積土を除去した南側廊と南翼廊部を中心に測量を行い、平面図を作成した。建築上の総合所見についても太記が別稿を準備しているが、以下、一三年度の発掘成果の所見を記すにあたり、必要な限りで建築学上の観察も交えるものとする。なお、貨幣と封緘については、本誌に銘と年代決定についての村田の検討が掲載されているので、本稿では主としてそれらの発掘状況について報告し、村田報告の知見が聖堂の建設・改築時期の推定に関わる場合には参照することとしたい。

**1 仕切り構造物と小部屋** 翼廊部は昨シーズン確認されていた身廊と翼廊を分かち仕切り壁（これを仕切り壁9（PW9）と名付けた）の他、都合五枚の仕切り壁4～8（P



写真1 第4室と仕切り壁4～6

W4(8)により、第4室から第7室まで四つの部分に分かれていたことが確認された(図参照)。

第4室は、仕切り壁4と6によつて区切られ、内部戸口により身廊へ、また仕切り壁4と5の間の開口部により第5室へそれぞれ通じている広さ一坪もない小部屋である(写真1)。南翼廊が仕切り壁9により南大黒柱以東で身廊から完全に分かれていて、第4室は、南翼廊部から身廊部へと通じる唯一の通路となっているが、それと同時に、仕切り壁(4と)5により、通路上に、翼廊から身廊へ向かう際の控え室のような空間を作り出している。南大黒柱から南副大黒柱までを繋ぐ仕切り壁6に直角に取り付けられた仕切り壁5は、仕切り壁6に沿って折れ曲がり、第4室の分厚い内壁をなす形で築造されている。仕切り壁4も5と同じ工法・材質によるものと見受けられるから、第4室は仕切り壁6が設置された時点では存在しておらず、のちに仕切り壁4と5を取り付けることによつて新たに作られたものであっただろう。

第4室の内装は、分厚い漆喰の上に茶と青の暗色を基調に白線で描かれた疑似羽目板模様のフレスコで飾られており、それは特に仕切り壁5と6の継ぎ目周辺で良く残っていた。この部屋からは上述のようにほぼ完形に復元しうる粗製の壺(写真2a・b)や中期ビザンツの彩釉陶器の破

片の他、かつてテンプロンの柵を支えたとおぼしき小柱(21)が見つかっている(写真2c)。すなわち、このことは、ビザンツ中期にテンプロンにイコノスタシスが設置されて後(後述)、おそらく聖堂使用の最終局面にいたるまで、この部屋が何らかの目的で用いられていたことを示唆していよう。昨年度、身廊に続く内部戸口の外から、ビザンツ初期(五〜六世紀)とビザンツ中期(二〇〜一二世紀)の繊細な浅浮き彫りをそれぞれ片面ずつに持つ大きな羽目板断片二件(68・72・72a・c・84・84a・146・110・110a)と十字架浮彫を刻んだ丁寧な仕上げの四角柱(117)等、この聖堂にとって価値高いとおぼしき飾り部材が出土してい

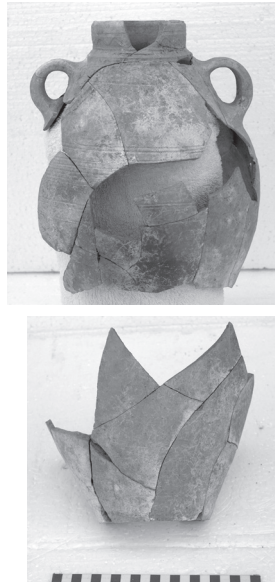


写真 2a, b, c

たことに鑑みれば、この部屋の周辺は、特に最終局面において重要な意味を持たされた区域であつたらしい。炭化した土は、一昨年度、北翼廊と身廊を繋ぐ内部戸口の上からも見つかったが、それが火の使用痕なのか火災の跡なのかは、それが局限的に観察されることから前者の可能性が高いとはいえ、今のところ不明である。

**第5室**は、仕切り壁4・5の設置までは第4室とつながって南側廊の延長として機能していたと考えられる一方で、それら（と、場合によれば仕切り壁7）の設置後は、第4、第6、第7室に対する玄関ホールのような役割を持たされることになった小部屋である（写真3a）。この部屋からは建材以外のめばしい出土遺物としては唯一青銅製の小燭台が見いだされた（写真3b）が、それは窓を持たないこの部屋から見つかるのにふさわしい遺物といえる。室内装飾については、仕切り壁4と仕切り壁7表面の残存状態が悪いこともあってよくわからない。

**第6室**は、南翼廊の、おおむね副大黒柱以南を翼廊の東西全幅に渡って占める細長い部屋である。東側の外壁には、北翼廊におけるのと同様、外部戸口（EOD2）が開けられているが（写真4）、北翼廊のそれ（EOD1）が後代に塞がれてしまったのとは異なり、後代に数十cm狭められつつも、聖堂の全使用期間を通じて機能していたものと考



写真 3a 第5室と仕切り壁7

えられる。この戸口から入って左側、南壁に沿って床の上六〇cmの高さで4号墓が築造されていた。この墓の発掘についての詳細は後述するが、第6室との関わりについてのみ簡潔に記しておく、その石槨は床面を覆っていたモザイクの上に煉瓦と石を積んで築造されているのが確認される（写真5）ので、床面レヴェルより一m下にまで達しているこの墓自体は、聖堂創建当時から存在したものではなく、後代に床面を掘り抜いて作られたものと見なしえよう。第6室の床面については、いまだその上の瓦礫の堆積を除去しておらず正確な状況は不明ながら、発掘の過程で露出してしまった、戸口から4号墓にいたる床面の一部では、創建当初敷かれていただろうモザイクのほとんどが見えず、モルタル面ないし土面が確認された。4号墓には、後述のように灌奠のためと思われる設備があり、この墓は一



写真 3b 燭台

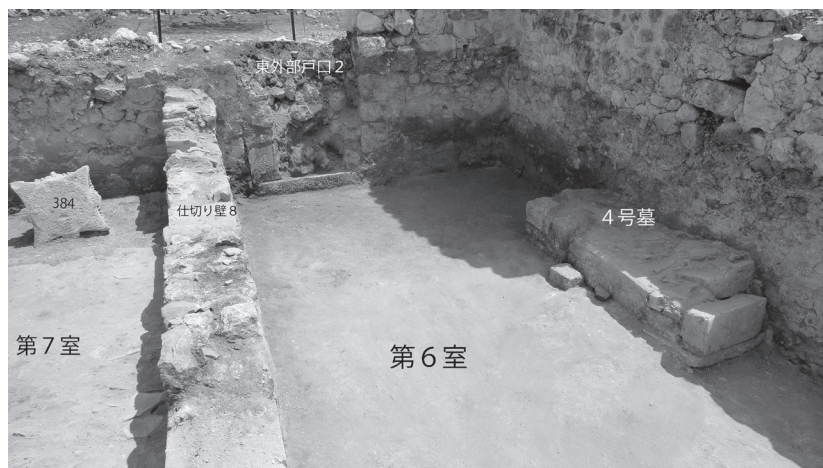


写真 4 第6室と外部戸口、4号墓



写真 5 4号墓基盤のしつらえと舗床モザイク

定の期間、おそらく地元の有力家系であったであろう一族や子孫らによる崇敬と手入れを受けたものと推察されるから、そうした人の出入りが舗床モザイクの損耗（ないし被覆）を招来したのかもしれない。なお、4号墓の西面立ち上がり際付近から、中期ビザンツのものと思われる乳白地に茶色の絵の具と線刻による特徴的な幾何学紋を持つ彩釉鉢の断片（写真6a・b）が見いだされたが、それは死者の弔いや魂の慰めと関係したものであった可能性がある。

第6室の内装については、翼廊の南西隅の壁に、二重の半円が連なる鱗模様の下書き線を引き、その上に赤・黄・茶などの色を乗せて描いたフレスコが残されているのが見て取れる（写真7）。このフレスコは、単層の漆喰の上に描かれているので、おそらく創建当初のものであろう。残念ながら漆喰の残されている部分は決して広くなく、当初の漆喰の上に漆喰が塗り重ねられて、新しいフレスコが描かれることになったのかどうかについては分からない。

第6室でさらに特記すべきは、西側の壁近くからの鉛製の封緘の発見であろう。見つかったのは、発掘前地表面からは四〇～五〇cm下、床面からは一mほど上のレヴェルであった（海拔四七三・六五〇m）。この層位は、ちょうど翼廊の躯体の主要部が崩落してできた瓦礫堆積層の上、その後の放置期間に形成された堆積層の下に当たるものと思わ



写真 6b 白釉地幾何学紋鉢（外）



写真 6a 白釉地幾何学紋鉢（内）



写真 7 第 6 室壁画フレスコの下描き

れる(トルコ隊の発掘方針もあり、本来取るべきセクション図は採録していないが、封緘発掘前のセクション写真(写真8a)を掲げる)。この封緘がもともと何に取り付けられており、またいかにしてその位置に放置されたのか、捨てられたのか、あるいは落とされたのかについては不明ながら、南翼廊主要躯体の最終的崩落後のものとの推測が当たっていれば、比較的蓋然性の高い可能性として次の二つを考えてみる事ができよう。一つ目は躯体崩落後、教会にとって必要な書状を掘り起こした過程で封緘を施された紐が千切れて落ちたという可能性、二つ目は、崩落後の再建の試みの中、建築資材ないし建築機材の容器や包みの封をしていたそれが落ちたという可能性である<sup>3)</sup>。

これら二つのうち、あまりありそうにないのは前者である。すなわち、書状に付けられた封緘は、宛先に届けられた後はその内容と差出人の真正性を保証していたはずであり、そのように貴重な徴票が、なぜ落ちたままにされたのか理解され難いからである。もちろん、急いで書状自体を持ち去る必要があったとか、書状自体がその場に置き忘れられ封緘を残してそのまま朽ちてしまったなどの可能性がないわけではないから、この可能性を完全に排除してしまふわけにはいかない。しかし、出土層位からみて、崩落後に届いたものをこの場で開封して捨てたというありそう

にない想定を受け入れるのであれば、崩落した瓦礫の中からわざわざ掘り出した文書や封緘をそのようにおろそかに扱ったと考えるのはいささか無理がある。

では、後者の可能性についてはどうであろうか。封緘の作成主は地方管区テマ・キュビライオタイの高官であるが、その爵位と官位の組み合わせから、封緘の年代は一一世紀初頭より下るものとした村田の推定に従えば、この封緘と第七室の床面付近から見つかった九八九年から一〇〇一年製造の金貨との関係は興味を惹かずにはおかぬ。出土層位の違いから最もシンプルに考えれば、南翼廊の躯体の崩落は、金貨が落とされて以降、封緘が落とされるまでの時期、おそらく一一世紀あたりに起こり、その後、政府の肝いりで再建資材や機材が送られ、この場所の近くで荷ほどきされたという筋書きがまず考えられよう。封緘が書状でなく、包みや箱に付けられていたのなら、荷ほどき時に落とされたということはありそうに思われる一方で、しかし、崩落と再建の試みのクロノロジーについては、それほど単純ではない。南翼廊に限っても、聖堂が経験した崩落は複数回におよび、またその崩落の合間の期間における瓦礫除去や再建の試みは、場所により状況が異なっていたかもしれないからである。すなわち、封緘が見つかった南翼廊西外壁あたりで躯体崩落後に瓦礫除去が行われてい



写真 8a 封緘発見位置



写真 8b 発見時の封緘

なくとも、金貨の見つかった東外壁周辺では行われていたという可能性は確かに存在し、しかも後述するように、いつとは特定できないながら、東外壁周辺で躯体崩落後、いったん瓦礫が除去されていた可能性は高い。すなわち、これらを考え合わせると、我々が、封緘についても金貨についてもその使用年代の下限を知り得ない限り、出土場所が違ってしまえば、そこから導き出せる推論は大して多くなく、またそうした状況での推論はいずれも不確かであるということである。聖堂再建の試み(のひとつ、ないし幾つか)については、すでに昨年度、身廊についてそれを示唆する証拠として柱頭のリフォームについて指摘したけれども、すぐあとに述べる第7室の円柱と仕切り壁の検討、4号墓内部の検討などからも示唆され、より詳細にそのクロノロジーを明らかにするためには、少なくとも、来年発掘を予定している身廊床面の検討を待たねばならない。

**第7室**は、仕切り壁6、8、9によりそれぞれ西、南、北側で他の空間から区切られ、仕切り壁6の南隅寄りに戸口を持った長方形の部屋である。戸口付近からはドアの取っ手がみつかった。仕切り壁8は、副大黒柱からその東にほぼ等間隔で置かれた二つの小柱台を繋ぐ形で築かれていたが、小柱台は北翼廊でも相当する位置に確認されており、創建時には、翼廊で東西方向の梁を支える円柱を戴いてい

たものと考えられる。218と219をその断片として上部の破損の激しい316の円柱(長さ3m、底面直径四九cm)が、底面を仕切り壁8に向け、上述のブラットフォームの上、南北方向に倒れていた(写真9)。316は五〇cm近い低面直径を持つているので、一辺四〇数cmの小柱台にもともと置かれていたと考えるには太すぎる。北翼廊では、これと同様の太さと長さの柱は、北大黒柱と北副大黒柱の中間の位置にあつて南北に梁を支えた円柱であつたと考えられるr16が、柱礎から北側廊側に向けて倒れていたのが見つかった。<sup>(3)</sup> ほぼ同じスケールを持つ316は、南翼廊でr16と対をなす、梁を南北に支える円柱であつた可能性が高い。しかしながら、奇妙なことに316は、上述のごとく仕切り壁6からは数メートル離れたブラットフォームの上に倒れていたのみならず、南翼廊でその柱礎の設置が期待される場所には柱礎の代わりに仕切り壁6が立っている。このことは、南北の梁を支える円柱の倒壊後、同じ場所に再建する試みは放棄され、むしろその柱礎を取り去って仕切り壁6が造られたという可能性を示唆しているよう。円柱316の上部断片218と219は、発掘前地表面の二〇〇三〇cm下と、かなり浅い層位から出土している。このことは、316は、その倒壊時に上部が、すでに落ちていた瓦礫に強くたたきつけられて、激しく損壊したということを示しているように思われる。



写真9 319の円柱と仕切り壁8の小柱台

オリジナルな位置から取り去られた316が、小柱台の上に立っていた可能性は低いので、いかなる理由であったかは分からぬものの、仕切り壁8に立てかけられていたか、プラットフォームの上に立てられていたのであろう。なお、仕切り壁6に近接した位置に、直方体の石材、ないし構造物が確認されたが（写真10）、その目的・機能は不明である。仕切り壁9は、前年度に推測したように、七つの部分からなっていることが確認された。築造様式に違いは認められるものの、どのような築造順になっていたか、現在のところ不明である。それを知るためには、モルタルの分析など工法の検討が必要であろう。

上述のごとく、第7室では、東の外壁際、北寄りの床面レヴェルから、一〇世紀末に発行された金貨が見付かった。貨幣の検討は村田報告に譲るが、第7室の東外壁寄りの場所では、金貨と同じく床面レヴェルに、ほぼ完形に近いコリント式柱頭<sup>384</sup>と、太さが七五cm近くもある未仕上げの円柱のドラム<sup>390</sup>が見つかったという事実は特記に値する（写真11a・b）。これらはふたつとも、聖堂建築のコンテキストに照らせば、この部屋から発見されることをおよそ期待されない種類の部材だからである。これらの巨大で重厚な建築部材、なかんずく円柱ドラムは、クレーンや梃子などを用いなければ、この場所に置くことは難しく、また、



写真10 仕切り壁9と第7室（316は移動後の位置）

外壁がオリジナルな高さを保持していたなら、そうすることとは不可能であつただろう。東外壁は、特に円柱ドラムが横たわっていた箇所（東側で、ちょうどこの円柱を運び込むことができる程度の大きさで崩れている（写真11a））。390を運び込むために意図的に崩したのか、すでに崩れて空いていた隙間から運び込んだのかは不明ながら、少なくとも、実際に運び込んだ際には、とくにこの箇所（翼廊の躯体はすでにある程度崩壊していたと考えなければならぬ）。そして、壁体崩落後にもかかわらず、390と384が床面に接して置かれていたということは（特に390のすぐ下には舗床モザイクの存在が確認された）、これらの部材を運び込む前に、床の上に積もった屋根や壁材の瓦礫を除去したということを示唆するであろう。いずれにせよ、南翼廊のこの場所で、未加工の円柱ドラムと、加工前のコリント式柱頭が見いだされたことは、金貨の製造年代が指し示す一〇世紀末以降の時代に聖堂再建の試みがなされており、何らかの理由でその試みが途中で放棄されてしまったということを示しているのではないかと思われる。そうしたことは、昨年度、身廊の説教壇近くに、再加工して意匠をビザンツ風に改変する途上で放棄された柱頭が見付かっていたこととも関連しているかもしれない（後述）。

仕切り壁6、およびその後の5の設置時期と、円柱ドラ



写真 11a 円柱ドラム 390 と柱頭 384（316 は移動後の位置）



写真 11b 円柱ドラム 390 と柱頭 384

ムや柱頭が第7室に運び込まれて再建が試みられた時期、そして身廊におけるイコノスタシス設置と崩壊の時期の後関係については、現在のところ不明とせざるをえない。現在、少なくとも言えることは、円柱ドラムと柱頭の上にも、仕切り壁6の上にも瓦礫が積もっていたことから考えて、これらの再建の試みの際、南翼廊では、なお躯体の構造物は、現状よりは原型をとどめていただろうということのみである。身廊のイコノスタシスの柱列についても、翼廊部に比べて堆積は薄いがある程度同じことが言えよう。

## 2 4号墓 第6室南外壁に接する形で築かれた4号墓

は、かぶせられた蓋石(劇場のカヴェアの部材などの転用材)まで含め、高さ六〇cm前後、横幅二m二五cm、奥行き八〇〜九〇cmの直方体で、石槨部の内のは一五〇cm×六〇cm、東側には幅五五cm前後の、おそらく死者の吊いの祭礼に際し小祭壇として用いられたであろう台状の構造体を有している(写真4)。

一昨年度、北翼廊第1室内で、四つの小祭壇状の構造体を発見し(それぞれ祭壇A・B・C・Eと名付けた)、AとBの間に2号墓、AとEの間に3号墓を見いだしていたが、今や4号墓が日の目を見たことで、類比から次のように考えることが可能になった。すなわち、第一に2号墓と

3号墓も、祭壇AとB、祭壇AとEを繋ぐ形の側板を持っていたであろうこと、第二に、その側板の多くは、第1室内床面レヴェルでいくつも見付かった、テンブロンないしソレアの障柵を転用したものであったであろうこと(そしてそれらは厚さ一〇cm前後の薄い石板であるため、躯体崩落の衝撃により、周辺に四散

したのであること)、第三に、おそらく祭壇Dと北外壁までの間にも同様のしつらえで、墓が築かれていたであろうこと、の3点である。ミュラの聖ニコラオス聖堂の外側廊には、テンブロンかソレアの障柵を側板に転用したと思われる石棺墓が見いだされているので(写真12)、そこから第1室の墓所の復元イメージを得ることができよう。



写真12 聖ニコラオス聖堂の石棺墓



写真 13 瓦礫の詰まった 4 号墓



写真 15 4 号墓の瓦礫



写真 14a B1



写真 14b B2

さて4号墓の発掘であるが、蓋石を取り外してみると内部には、ほぼ床面レヴェルにいたるまで、比較的整った形の煉瓦・瓦埴が、無秩序にというより、むしろ丁寧に平積みされており、その下から幼児とみられる二体の遺骸（B1・B2）が葬られているのを発見した（写真13・14）。詰められた煉瓦が二体の遺骸埋葬当初からのものかは不明ながら、遺骨の損壊と消失が激しいことに鑑みて、後から詰められたもののように思われる。埋葬時、遺骸の上に煉瓦を積むことは考え難いのみならず、一度暴かれたのであればこれほどの遺骨の損壊は生じなかっただろう。詰められていた煉瓦等は、興味深いことに、4号墓周辺のみならず聖堂遺構全体の瓦礫に見られるそれらと、欠け方やモルタル・漆喰の付き方においてなんら変わるところのないものであり、聖堂崩落後の壁体構造材等と考えられる（写真15）。上述のごとく丁寧に積まれていて、また蓋もかぶせ直されていることからすれば、墓荒らしの仕業ではなく、聖堂崩落後、十分保護の行き届かなくなった墓を掘り起こし、内部に煉瓦を積めて埋葬し直すことで盗掘から守ろうとした後代のキリスト教徒の所為と考えうるかもしれない。

遺骸B1とB2は、煉瓦等に押し潰されて幅一〇cm程度の層位の中から掘り出されたが、B1とB2の中間あたり、

北側壁の近くから四cm×三cmほどの青銅製の、斜めに格子模様のインレイがほどこされた小さな十字架が、またB2の足下から二cm×二・五cmほどの翡翠の十字型ペンダントヘッドが副葬品として確認された（写真16a・b）。これらの副葬品から年代を割り出すことはできない。



写真 16a 十字架

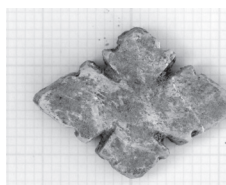


写真 16b 十字架

二体の子供の遺骸の下に、煉瓦と外壁の基礎のモルタルで仕切られた内檜が現れ（写真17）、その中の土層を一〇cmほど掘り進めると、床面レヴェルから一五cmほど下から、乳児と、乳児を胸に抱いた母親と思しき成人女性の遺骸が発見された（B3・B4）（写真18）。

成人女性の頭骨と乳児の遺骸は押しつぶされて破損が目立ったが、埋葬時の状態は良く保たれていた。盗掘の形跡はなく、副葬品も当初置かれたと思われる位置から出土している。女性の左腕には長径八cmほどの青銅製の腕輪



写真 16e 聖遺物入れ（繊維付き）



写真 16c 腕輪



写真 16d 十字架



写真 16f 裏面



写真 16g 聖遺物入れ表面

が、右脇腹近くには本体一〇cm×六cmの十字架をかたどった青銅製の聖遺物入れ、いわゆるペクトラル・クロスが女性の衣服の繊維の一部を付けたままで、また、左腰のあたりからは三・五cm×二・五cmほどのキリストの磔刑を象った青銅製の十字架がそれぞれ見いだされた(写真16c・e)。そのうち、聖遺物入れの表面には聖母像とΜήτηρ Θεοῦ(「神の母」)の文字、裏面には聖ヨハネの像とΙΩΑΝΝΗΣ(「イオアネース」)の文字がそれぞれ刻まれていた(写真16f・g)。この種の聖遺物入れは、古代末期からビザンツ中期まで、ビザンツ旧領内ではいたるところに見られるので、年代決定の決め手にはならない。女性の遺骸の下から、直径一cmに満たない腐食の甚だしい青銅貨が発見されており、村田報告に従ってそれを五世紀から七世紀までのものとみなしうるとしても、その貨幣がこの女性と乳児を葬った人々に属するという確証はない。もちろん、その可能性は排除されないし、実際、ありそうなことではあるけれども。女性の遺骸の下には、4弁の花模様の深浮彫りを持つ厚さ一〇〜一三cmほどの、おそらく古代に由来する石板が敷かれていたが(床面レヴェルより約四〇cm下)、遺骸は直接石板の上に置かれたのではなく、頭から膝のあたりまで一〇cmほど盛り土をされた上に安置され、ちょうどリクライニングするような形で膝から下を、石板と東側壁



写真 17a 女性の遺骸



写真 17b 遺骸下のレリーフ付き石板

の間の四〇cmほどの空間に落として埋葬されていた（写真 17a・b）。

4号墓の内槨はこの母子と思われる遺骸を埋葬することを意図して作られたものと思われる。B1と2の幼児の遺骸は、いかなる棺状の構造体にも保護されず、土の上に置かれていたので、おそらく追葬であっただろう。追葬以前、元々は内槨を形作る煉瓦の縁と南外壁の基礎のモルタルの縁の間を差し渡し形で蓋が置かれていたかもしれない。というのも、4号墓の西側には、灌奠のためと思われる注水口が開けられ、そこから注入された液体を遺骸にまで届かせるための注水路と、余分な液体を排出する排水口が作られていたように思われるからである（写真18）。注水路とみなしたモルタルへの溝の掘り込みは、蓋が存在したと仮定した場合にその意味を最もよく理解できる。すなわち、蓋がなければ、注水口から注がれた液体は遺骸の頭部に直接掛かってしまうが、蓋があれば、いったんそれ受け止め、遺骸の左手に迂回させて液体を届かせることができる。いずれにせよ、現状では、これは単なる推測にとどまり、はっきりしたことを知るためには、類例に照らした検証の作業を必要としよう。

ところで、さらに下のレヴェルに目を向けると、遺骸の足下、東から四〇cmまでは石板の差し渡しが届いておらず、



写真18 灌漑システムと推定される構造

下方に空間が空いてさらに下の地下墓に続いていた。床面レヴェルから一m下まで達するもので、ちょうど女性の遺骸の真下にあたる場所に、成人男性のものと思われる遺骸が見いだされた。この地下墓は加工精度の高い古代の部材を用いて整然と、かつ堅牢に築かれており、女性の遺骸の下に敷かれた花紋レリーフ付きの石板はこの地下墓の蓋であったかもしれない。この地下墓とその上の4号墓との関係は探求に値するが、それが聖堂創建以後のものか以前のものか、あるいは創建当時のものかといったことについて知らせてくれる材料は今のところ全くない。この墓を発掘したからといってそうした情報を得られるとは限らず、また発掘するためには、4号墓を大きく破壊しないとならぬので、発掘は断念し、写真撮影のみにとどめることとした（写真19）。

**3 柱頭と円柱―イコノスタシス再考** 昨年度までの時点で、コリント式柱頭からビザンツ様式に改変された柱頭を六点、コリント式柱頭を、改変の過程にあったもの一点を含め計六点みだしていたが、南翼廊第7室で見付かった先述のコリント式柱頭一点（384）の他に、南側廊でもう一点コリント式柱頭（180）を発見し、総計コリント式柱頭は八点となった。これで、コリント式柱頭とビザンツ柱頭あ



写真 19 4号墓の下の地下墓

わせ、もともと身廊の列柱上に載っていた一四点の柱頭すべてを確認することができたものと思われる。

すでに推測していたことだが、これら身廊の柱頭のうちに六点ないし七点をテンプロンの列柱に載せるビザンツ柱頭に改変し、また少なくとも一点を南翼廊にまで持ち込んだいたとすれば、テンプロンの列柱を設けた時点では、半数以上の柱頭は、身廊の列柱からすでに落ちていた、あるいは落とされてもよい状態、すなわち身廊の躯体を支えていない状態にあったと考えなければならない。すなわち、身廊部は説教壇を含め、その本来の役割を果たしうるような状態になかったと見るべきで、創建以来テンプロンやソレアの腰高仕切りが機能していた時期から、これらの円柱が祭壇部を区切る形で設置された時期までの間に、聖堂使用の断絶があったと見るのが妥当と思われる。また、そのように考えれば、創建当時のテンプロン、ないしソレアの障柵が北翼廊の墓の側板に転用されていた理由もよく理解されよう。昨年度の報告書を執筆した時点では、列柱が設けられたのは古代末期の創建時、ないし、ビザンツ初期であった可能性があるものと考えていたが、今や、すぐ後に述べるアーキトレヴの意匠の検討からも、その時期は、隣市クサントスで東聖堂の洗礼堂が聖堂に改変された時期と同じあたり、すなわち聖堂使用断絶の期間の後、ビザンツ

中期の聖堂建築を特徴付けるイコノスタシスが設けられた時と考えるのが妥当であるように思われる（したがって今後は、こうしたフェーズの違いを明確にし、混同を避けるため、「テンプロンの列柱」ではなく、「イコノスタシスの列柱」と呼ぶこととしたい）。

さて、イコノスタシスの設置の時期であるが、円柱とその柱頭の上をめぐっていたと思われるアーキトレーヴの意匠の検討は、我々がこの点で誤っていたことを教えてくれた。すなわち、昨年度の報告では、様式の点からそれらを五〜六世紀のものとしていたが、その意匠は、一〇世紀後半あたりから一一世紀後半の装飾を特徴付ける、パルメツトや、葉飾りを戴く若木文といった一連の具象的モチーフ群に属することが明らかになったからである。そのほかにも修正すべき点はある。昨年の田中咲子による美術的観点からの報告は、意匠について、連続アーチと植物文を基本としながらも、植物文のプロポーション、また二重柱の長さや太さ、柱脚のプロポーションが様々であると指摘していた。<sup>8</sup>しかし、写真20にディテールの写真を示したように、わずかに二つのアーチの部分しか残っていない80aにおいてアーチ受けの形と柱の太さが違っているのみで、そのほかは、植物文、アーチ、アーチ受け、二重柱、柱脚のプロポーションにおいてかなりの程度で一貫性・統一性を認め

うる。実際、80aも植物文自体には他と大きなプロポーション上の違いはなく、アーチ受けの意匠の相違とみえる部分は、石工の過ちないしインスピレーションに由来するものと思われる。すなわち、石工はアーチと接する水平線か

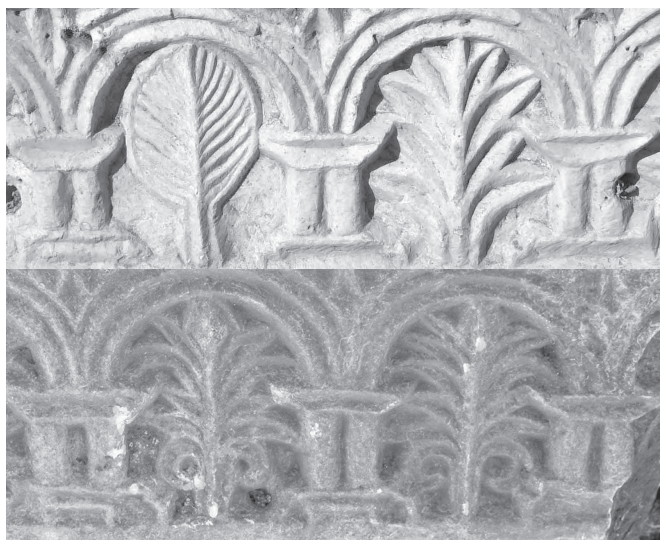


写真 20a, b 97（上）と 37（下）



写真 20c, d 43（上）と 80（下）

ら斜め下に彫り残すべき部分を削り落とし、天地逆に斜め上方に彫り残すことで、辛うじてアーチ受けであることを表現しようとしている。二重柱は他に倣って細くしてしまふとアーチの太さと同じになり、アーチ受けの欠落が目立



写真 20e, f 55（上）と 80a（下）

つので太いまま残したものであろう。アーキトレイヴ木口のレリーフはデザイン化・様式化されているとはいえ、列柱回廊の向こうに見える緑豊かな庭園の情景を描いており、80 aの描写は、石工のミスでなければ、アーチ受けと

柱を他と違う形で表現することで、回廊の曲折部を描こうとしたのかもしれない。

ともあれ、これらの浮彫りは、同一石工のものであったとしても一向に不思議はなく、少なくとも、これらが異なる



写真 20g イズミル博物館所蔵の部材

時代に属すると信じるような理由は全くない。ソディーニの論考の図版 XXXVII D に再録された九六七年創建のマニサの教会のアーチ・列柱連続文に若木文をあしらった装飾も、また XXXII a や XXXIV a にみられるクサントスの東聖堂のものと同様の、トロスの聖堂のものと類似の意匠と認められる。またミュラの聖ニコラオス聖堂からも同様の意匠を持つ（しかし、聖堂の規模と地位を反映し、さすがに手が込んでいて仕上げが精密な）ア

ーキトレーヴ部材が現れており、一〇世紀後半から一一世紀後半に年代づけられるこの種の意匠の実例は、コンスタンティノープル周辺やエーゲ海沿い、ギリシア本土のみならず、フリュギア地方やリキア地方にまで広く及んでいたことが確認される。フリュギアの実例は MAMA の IV 巻や、最近出版された X 巻に掲載があるので、それらの図版を参照していただくこととし、上には、イズミル博物館所蔵の未公刊の類例を一件のみ提示しておく。

図にも示してあるように、これらアーキトレーヴ部材はいえ、説教壇近く（27、38、39、40）や南側廊から（153）も断片が見付かっている。また昨年度の報告でも触れたように、イコノスタシス近くから見付かったものでも、片方の木口面を斜めに切り落とされてリサイジングされているものもある（42、43）。こうした事実は、柱頭とアーキトレーヴを戴いたイコノスタシスの列柱がいったん倒壊した後、なんらかの再建の試みがなされようとしていたことを示すものと思われる。昨年度、説教壇近くに加工途中で放棄された柱頭（17）が見付かっていること、南側廊から身廊にかけての腰高障壁が崩され通路が確保されていること、南翼廊の第4室が遅い時代まで継続使用され、またその周辺に重要装飾材を集めた形跡があることなどを併せ考

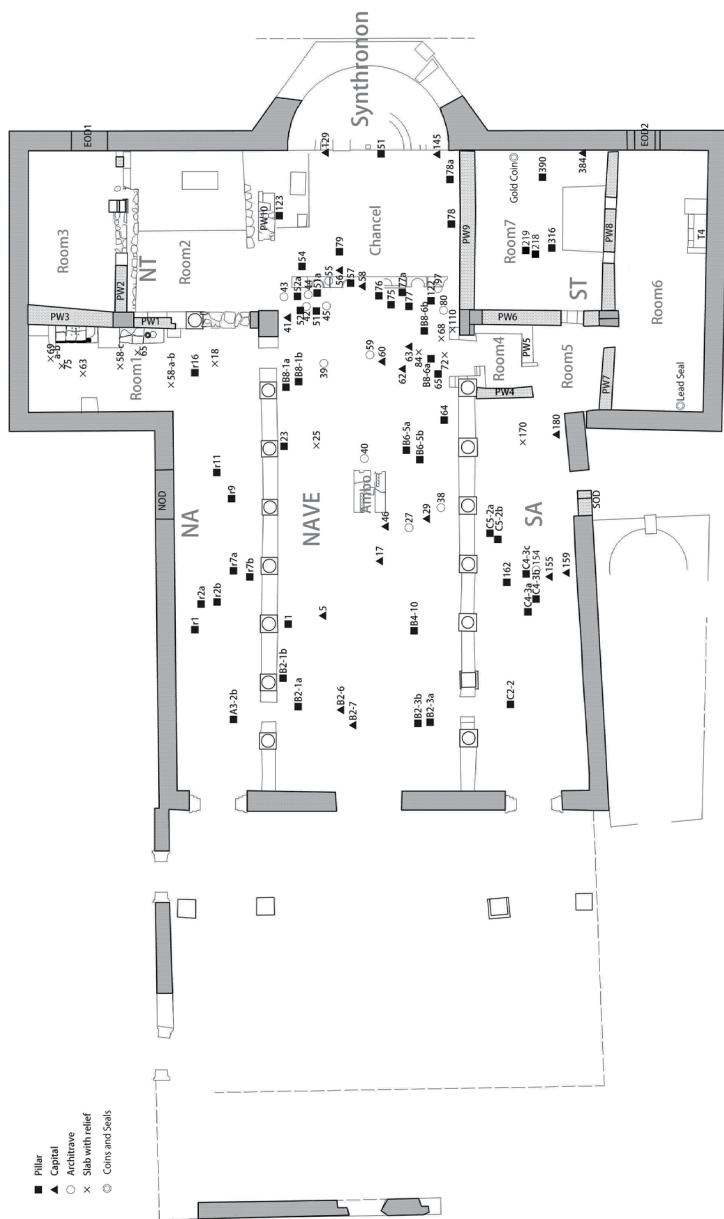
えると、説教壇付近からイコノスタシスと第4室あたりまでは、イコノスタシスの列柱が倒壊した後、再再建のための作業場としてつかわれたのかもしれない。

クサントスの東聖堂の洗礼堂を改築したビザンツ中期の聖堂には、火災の痕跡がはっきり残っているが、アーキトレヴ部材は、火災後に床面の舗装材や戸口の柱などに転用されていたという。詳細はデデスキ報告に譲るが、我々も、トロス聖堂身廊祭壇部の一部を発掘して、大きく破壊された床面が様々な大きさの部材で補修されているのを見いだしている。数十kmしか離れていない隣接都市のクサントスで、一〇世紀後半以降の聖堂再建後にそのような深刻な被害があり、またトロスでも同じような時期にイコノスタシスを崩落させるような大きな被害があったとすれば、それはこの地域を襲った地震によるものと考えるのが最も妥当かもしれない。

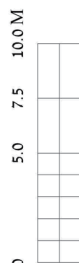
その一方、クサントスでは、洗礼堂を改築してできた新聖堂は、小規模ながら身廊とナルテックスを備え、ビザンツ中期聖堂として完成した姿を現していたが、トロス聖堂には、イコノスタシスの円柱の他には聖堂が機能するのに必要な部屋や施設の痕跡がまだ確認されていない。このことは、トロス聖堂が一〇世紀末以降に再建の試みの途中で再び地震などの被害に見舞われ、その後の再再建の試みも

途中で断念されてしまったということを意味している可能性がある。いずれにせよ、二〇一四年度には、身廊祭壇部の床面まで掘り起こす計画なので、こうした可能性の是非について、なんらかの情報を得られることが強く期待される。

なお、床面を開いた第2室東半部からは、一〇点以上の獣骨が採取された。仔ヤギの骨の一部等であり、北翼廊の床面が見えていた段階で、家畜に関わる遺物が残されたというのは、この建造物がキリスト教の宗教施設であるだけに興味深い。それらが残された経緯やコンテクストは不明ながら、今後共、こうした「予期されざる」遺物にも注視を要する。



- Pillar
- ▲ Capital
- Architrave
- × Slab with relief
- Coins and Seals



TLOS : BASILICA

drawn by TAKI Yuichi  
cooperated by KAWAMOTO Satoshi & YAMANE Youki  
Fukuoka University / JAPAN  
2013/08/21 Tlos / TURKEY

トロス司教座聖堂発掘報告  
(浦野) (三二〇二)

註

- (1) 封緘を施されていた書状が、その保管されていた場所で焼失、ないし腐食してしまったという可能性は低い。すなわち、封緘の発見場所は床面より1mも上の位置であり、南翼廊西壁に開けられた窓のすぐ下である。重要な書状の保管場所として、ふさわしいかと思われるばかりか、他の封緘は発見されておらず、封緘を施された書状が単独で保管されていたと見なければならなくなる。
- (2) 村田光司「トロスコ教座聖堂発掘報告(二〇一三)―出土貨幣および封緘について」本誌所収。
- (3) 浦野聡「トロスコ教座聖堂発掘報告(二〇一一)『史苑』七二―二二〇二年三月(以下、浦野「二〇一一報告」と略記)」、一二二―一二三頁。写真12参照。二〇一一年度の発掘部材の番号は、1番から始まっていたが、二〇一二年度の発掘部材も1から順に番号を振ったので、赤のペンキでナンバリングしたそれらとして番号の前にrを付すこととした。
- (4) 浦野「二〇一一報告」一二七―一二九頁。
- (5) 浦野聡「トロスコ教座聖堂発掘報告(二〇一一)『史苑』七三―一二二〇二年三月(以下、浦野「二〇一二報告」と略記)」、一〇一―一〇七頁。
- (6) J.-P. Sodini, Une iconostase byzantine à Xanthos, *Actes du colloque sur la Lycie antique*, Paris, 1980.
- (7) *ibid.*, 135.
- (8) 田中咲子「トロスコ教座聖堂発掘報告(二〇一一)『史苑』七三―一二二〇二年三月、一三一頁以下。
- (9) J. Borchardt (Hrsg.), *Myra. Eine lykische Metropole in*

史苑(第七四卷第二号)

- antiker und byzantinischer Zeit*, Berlin, 1975, Tafel. 119E, 120A-C.
- (10) *MAMA* XI, 190, p. 185; *MAMA* IV, 95, cf. H. Buchwald, "Chancel Barrier Lintels Decorated with Carved Arcades", *JÖB* 45, 233-276.
  - (11) 浦野「二〇一二報告」一〇五頁。加工途中の柱頭17が、イコノスタシス設置時に改変されたその他六件のビザンツ柱頭と同じ時期に改変に着手されたのが、そのまま何らかの理由により途中で加工を断念されたという可能性と、イコノスタシス倒壊後、破損の甚だしい柱頭(特に八分の一しかみつかっていない129)を置き換えるために加工に着手されながら、途中で放棄されてしまったという可能性の二つが考えられる。後者の可能性が高いと思われる。
  - (12) Sodini, *art. cit.*, 123-124.
  - (13) *ibid.*, 122.
  - (14) 仕切り壁9が七つの部分に分かれると指摘したが、これは、もともと分かれていなかった構造物を、煉瓦等で繋いで、一連の壁としたものかもしれない。もしそうだとすれば、一〇世紀―一一世紀の聖堂再建の試みは、仕切り壁9を躯体の構造壁とする、翼廊を持たない形のバシリカとして構想された可能性がある。もちろん、その場合には、対称的な位置にある仕切り壁10も9と同じく構造壁とされなければならないが、そのように作られていないので、その事実自体、聖堂が再建途上であったことを示すとも考えられる。

(本学文学部教授)

In 2013 season, 1) rubbles and soils were removed from the easternmost one third of southern aisle (SA) and the entire area of southern transept (ST), 2) a triple layered tomb found in **Room 6** of ST was opened, and 3) the mosaic floor on the eastern half of **Room 2** of the northern transept (NT) were excavated and conserved.

As for the construction materials, two Corinthian capitals were discovered, one (180) in SA, the other (384) in **Room 7** of ST. In total sum, eight Corinthian and six Byzantine capitals are attested. The latter are thought to have been reformed from the former, perhaps when the six massive chamber barrier columns were set as were in the East Basilica of Xanthos in the middle Byzantine period, and crowned by architraves with arched botanical reliefs (Byzantine capital 58 shows some traces of old carving of acanthus leaves on its surface; Corinthian 17 was placed up-side-down on the floor near the *ambo* and seems to have been left unfinished in an early stage of its reforming process, as it had been had its leaves ripped off at the bottom part, which were found two meter distant from the body). Among others, two mysterious columns, a roughly finished thick one (390 d.74 cm) and a normal one (316 d. 49 cm), both found laid on the floor of **Room 7**, were worth mentioning. As for the former, for what purpose it was going to be used is hardly interpreted, as for the latter, though it being expected to have originally sustained the transept roof between the main and the sub pillars, the weak **Partition Wall (PW) 6** had been constructed in the place where its base should have been placed.

As is shown on the plan, ST was divided into four parts (**Room 4-7**) presumably in (a) later time(s), just as NT into three. While **Room 5** was an entrance hall led to the other three rooms (if it was not an extension of SA), the smallest **Room 4** formed an antechamber to the nave. The latter was dressed with thick interior walls lavishly decorated with dark colour frescoes of geometric motives. There were found a large common vase recoverable into its original entity (though some fragments have been missed), several fragments of a middle Byzantine glazed ware, and a square pillar of which size, design and finish are suitable for those of *templon* or *solea*. This room seems to have been still used at the last phase of the church. **Room 6** occupies the southernmost part of ST along its entire width, and its outer entrance to the east (EOD2) seems to have been constantly used, changing its frontage several times. There was found an official's lead seal with the legend of

Maria near the western outer wall at the level of ca. 0.6 m depth (about 473.650 m ASL) probably between the layer of rubbles of the collapsed building and that of later deposition. In this room a triple layered tomb (**T4**) was also found (see below). **Room 7** having a curious large platform (L. 2.80 m; W. 1.90 m; H. 0.30 m) on the southern side was completely separated both from the nave and **Room 6** by **PW 8** and **9**, and only approachable from **Room 5**. There was discovered a *Histamenon*, gold coin of the age of Basil II and Constantine VIII (976-1025) near the eastern outer wall almost at the floor level (472.772 m ASL).

The outer coffin of **T4** (L. 2.25 m; W. 0.90 m; h. 0.60 m) was constructed mainly with thick and heavy stone slabs and blocks on the floor of **Room 6**. It had been equipped with a libation system in all probability, because of the presence of a filling port and an outlet, each 0.4 m and 0.2 m above the floor level. Under the stone lid, rubbles were found (indistinguishable from destructed construction materials) stuffed in a relatively tidy manner, and under them, at the same level as the floor's, heavily damaged remains of two children (**B1** and **B2**) were. A small incised bronze cross was found buried near **B2**. Ca. 0.10m below the level of these remains, though without any lid or coverage except for soils, well protected by an inner coffin made of bricks, remains of mother and baby held on her chest (**B3** and **B4**) emerged, probably intact to the present. Mother wore a bronze bracelet on her left arm, and small bronze pendant cross of Calvary at her left flank. At her right flank was put a pectoral reliquary bronze cross with figures and inscriptions **MP ΘΥ** and **HOANHC** (Μ(ήτηρ) Θ(εο)ῦ / Ἑοαν(ν)ῆς) incised on both sides, on which her cloth remnants were sticking. Under mother's body there was a stone slab adorned with a flower of high relief laid as the bottom plate, with a 0.20 m wide slit open beneath her feet. By photographing through this slit, it is ascertained that an adult remains (**B5**), probably a male one, were scattering, but we left them untouched. This underground tomb was there 0.80 m below the floor level.

Mosaics in **Room 2** were revealed to have quite similar geometric designs to those of the north annex to the baptistery of Xanthian East Basilica. They have an outer band with ivy scroll and an inner band with alternately interlaced circles and squares. In the field there is a carpet of rows of interlaced large tangent circles overlapping each other in an intersecting manner, with their interspace filled with also interlaced small circles. All are polychrome (white, red, brown, grey and black green). They were in a quite good condition as far as they survived, and of high quality in the technique.